

どこへ行った? ”Boys be ambitious!”

最近の若者の海外志向について、ほぼ時を同じくして二つの調査結果が新聞に載りました。一つは海外に留学しようとする学生が減少していること、もう一つは新入社員が海外への赴任を嫌っている傾向がある、ということです。

まず留学では、例えば米国への留学生は97年の4万7千人をピークに減り続け、昨年は3万人ほど。中国からは10万人、韓国は7万人を超えています。なぜそうなったのか、メディアの分析によれば、長引く不況で留学などをしてい



では就職時期に影響が心配されること、わざわざ治安が大変な海外に行くよりも安全で居心地のよい日本で楽な生き方を、といった若者の内向け志向が指摘されています。

次に、今春の新入社員のおよそ2人に1人が「海外で働きたいとは思わない」と考えているとの産業能率大の調査結果。この率は過去の調査よりも大幅に増え、内向きな意識の高まりを示していると分析しています。

一方で“急進的”とも思える企業の方針も話題になっています。日本ビジネスの先端をいくユニクロと楽天が、「社内の公用語を英語にする」との発表です。グローバル化は避けられない世界の流れの中で、グローバルな視点から人材を確保したいとの思惑からだといえます。この流れは他の企業にも伝播していくでしょう。

なぜ若者は外に出ようとしない、これほどまでに覇気がなくなったのでしょうか。自分が若かった半世紀前には、海外に出るための現在のような整った環境はなく、地方の学生には留学などは夢のまた夢でした。都会の高校生が行くフルブライト留学に憧れ、就職後は海外に派遣される仲間を羨望の目で見ていたものです。



若いときに叶わなかったそんな夢の実現のために、私は定年になってからスペインに留学しました。感受性はやや鈍くなっていたかもしれませんが、語学のレベルアップと共に、各国から集ったクラス仲間との交流や各地への訪問で豊かな思い出を刻むことができたものです。留学は語学習得は当然として、人生そのものを豊かにし活躍の舞台を広げてくれます。

マラが大学のクラスで 「夢が、志が人を創る。大きな夢と大きな志は大きな人生を創る」と言われています。自分を高めていくのも、自分を貧しくさせていくのもこの心次第です。世界には経済的なものだけでなく、もっとエクサイティングで大事なことがいっぱいあります。そんな異質な文化や生き方に感動し、啓発され、自らの世界が広がるのが留学であり海外駐在なのです。ここで死語になりかけようとしているクラーク博士の言葉をもう一度贈りたいと思います。

”Boys be ambitious!”